足利絹手染紫

第十四編笠亭

仙果作梅蝶樓

國貞画癸丑夏

へ13
3840
5

教育編

加藤弘之

足利絹手染紫

自十二編
至十六編

仙果作
國貞画

右足利絹手染紫流行と世上級高の足利絹
あるべきなれども江戸人望者の仕出し用る事
中ゆえ夏曲源郎傳とて此手紙八足と白絹に種を用ひ人名抜き大家
月報者は夏ゆえ先ず待見が実の中より見が市紫と白鶴と
数年完八巻を書き終り他と織り自分で染振り仙樹様流儀に乳を入れ
本文面白く作り出すなり秀男所の言葉とひとしく生れつきの性なる
ものなれば乗江先生に於ける時の先様を稽古を仕方体を教えられ
おいて大悦とす　ゆえに江戸に乳青紫中戒年十七の人

安政五戊午歳

神田　錦林堂　武井葉彫

足利絹第十四編上冊

笠亭作　楳蝶楼画

永禄四年三月晦日
将軍義輝卿三好
筑前守義長方へ
御成の記り

御鐙御紋香圖云〻

からのづそのゆうゑ
はるるとこ三百年
ゆゑのすぐゑあり

神田太田屋刊行

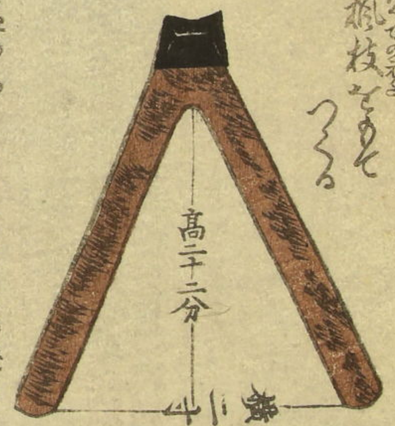
仙界下
十四編之
月泉画
竹題曲五閑名
十四編下

門へ13
3840
5

音究の形勢
寸法畧之

仙果化
国貞画
彩林堂
梓

和琴柱之圖
桐枝をもて
つくる



琴軋之圖

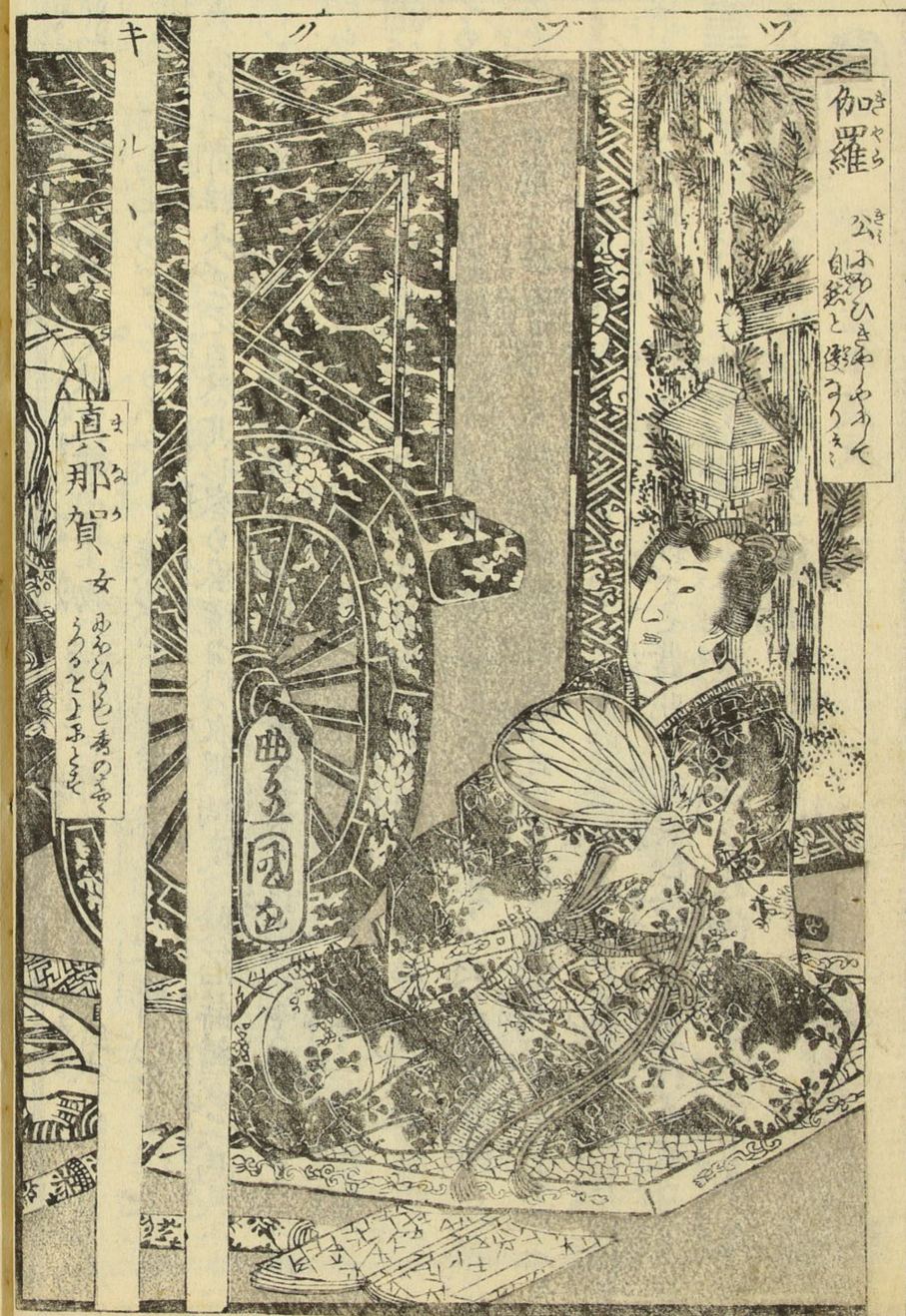
ことさらに撥をも
水牛角をもて
つくる

右樂家孫七卷ふんそくり

無形を有形ふ造成し定紋文様ふ用ふ物ハ三巴と源氏の巴より卦木ハ三巴二箇を組
乾為天坤為地ゑのごく名もおどぐく漢めいれい儒者ゑ殿酉師の孚歸ふとぐれと香圖い
巻の名ハ都雅ふつまゑ自然其形容も風流ゑれば衣服調度の縫箔蒔繪武具馬具ふさ
是とうけゑ古来今ふ發らぎれと幼稚入ハ五種十香の断續を真分る記號ゑかゆゑ形ふゑる由い辨へ
知らぬもあゑ本来圖のゑゑ桐壺と夢浮橋と補ふ為ゑゑ拙さゑ記しゑる百人首の整亀頭もゑり
而ゑも偽ちりと知ゑ振ゑる僕ぢめ源氏ハ好物故數回讀實ふ奇絶と感ゑ
ても注をゑそもゑ分解條ハ十ふ九ゑ是源氏讀の源氏ゑゑ
の光と千里鏡と移取ゑ〜ゑり頼朝義經の外ふ源氏の君ゑるゑ犬打孩兒すで知ゑる
ゑ源氏不讀の源氏ゑり數多出来ゑるぞいとめでゑき是ゑ高きを卑きふ下し花の梢も
折ゑび折ると柏之助ゑ紆通譯ゑふ到ゑて發明し弥励む拾遺の愚作も彼責トゑ
ゑりのわゑらぬも八卦ゑゑ當ゑるも八景近江の海浅ゑらぬ御引ゑふ手習夢浮橋
すで當ゑゑふゑゑりのと今ゑゑ只顧祈ゑふゑん

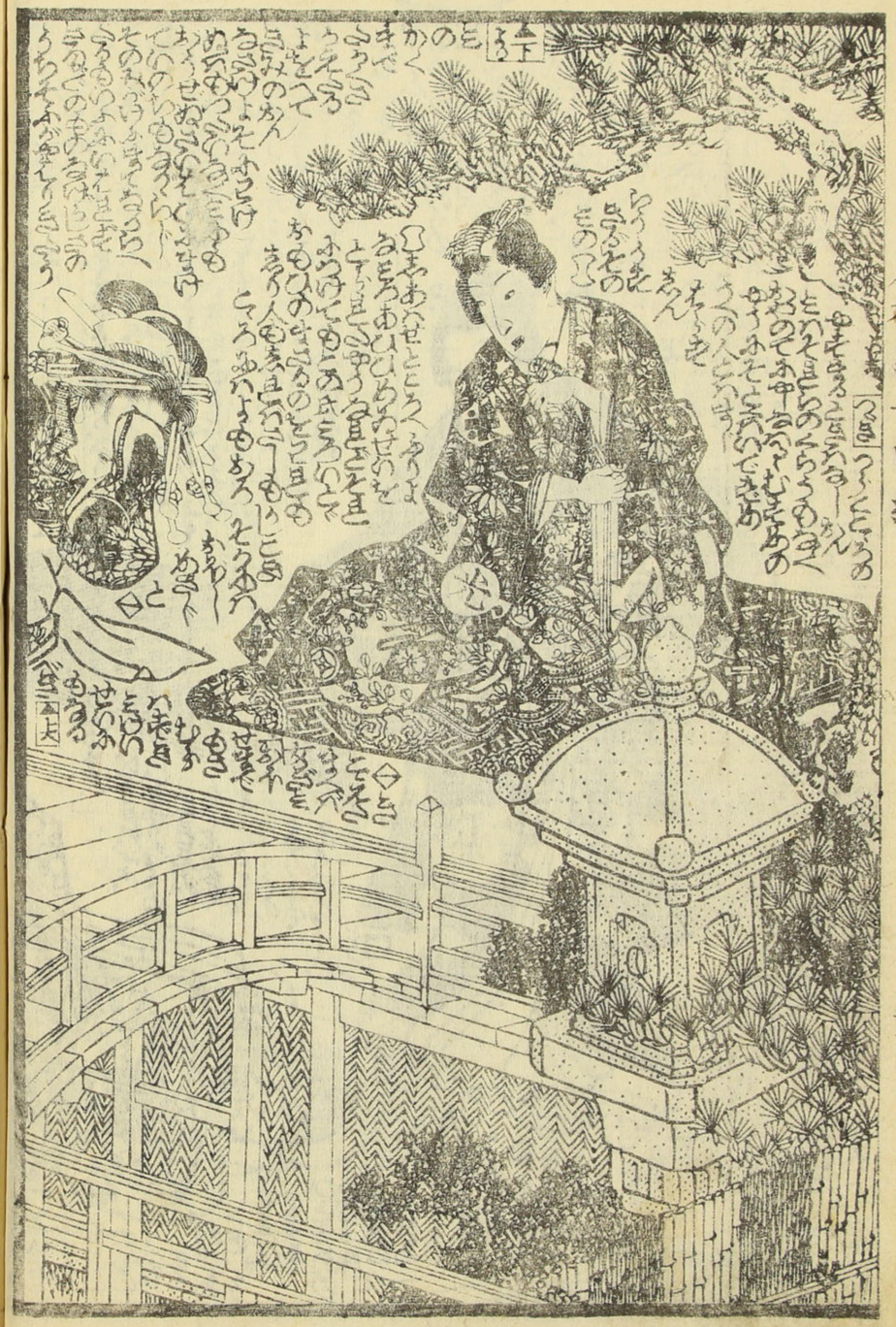
癸丑孟陬良辰

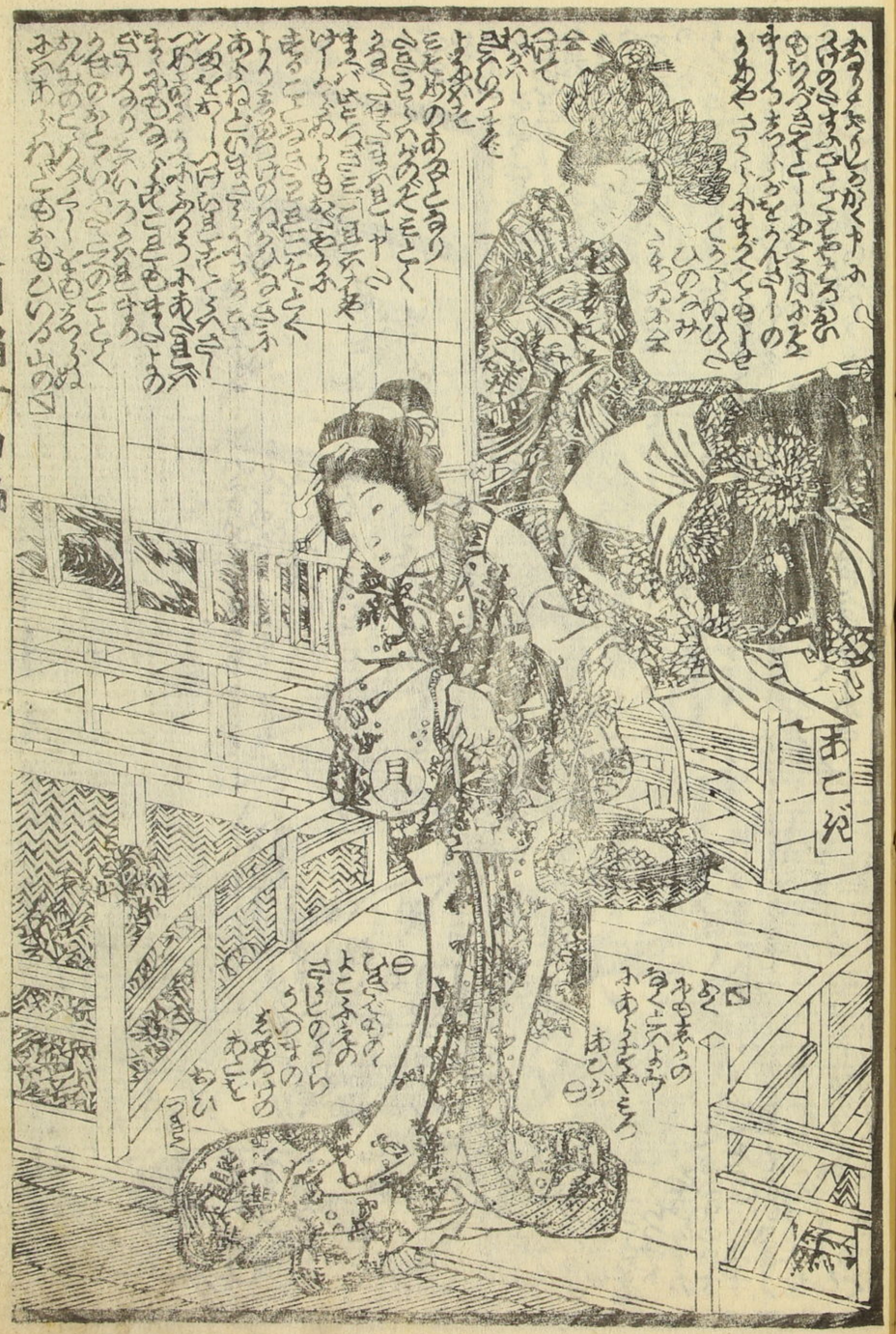
笠亭仙果記


伽羅公
真那賀女
曲亭国画

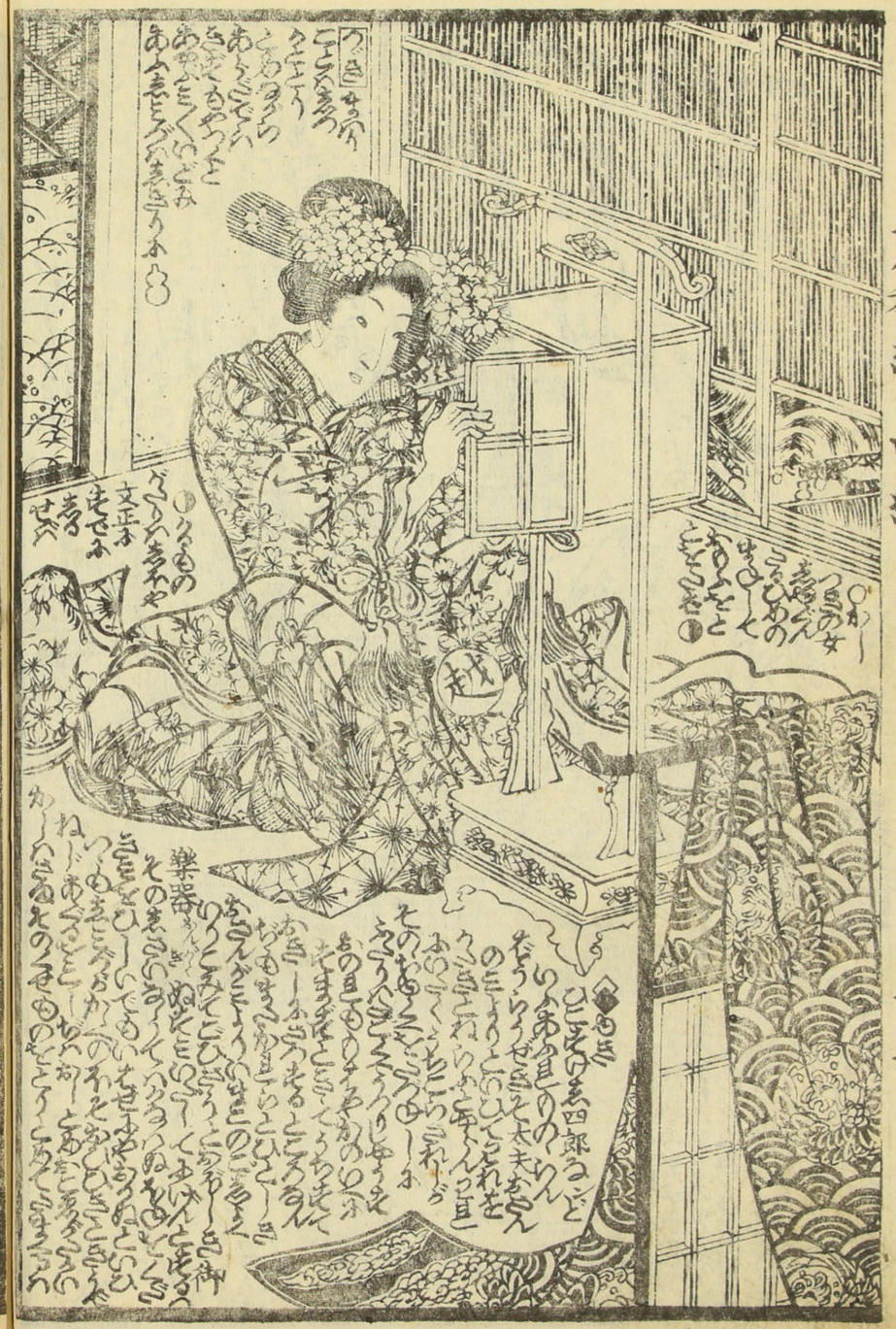
舞女瀬賀井
鬼道恵心院の
験僧 澡盤法師
佐尊羅僧

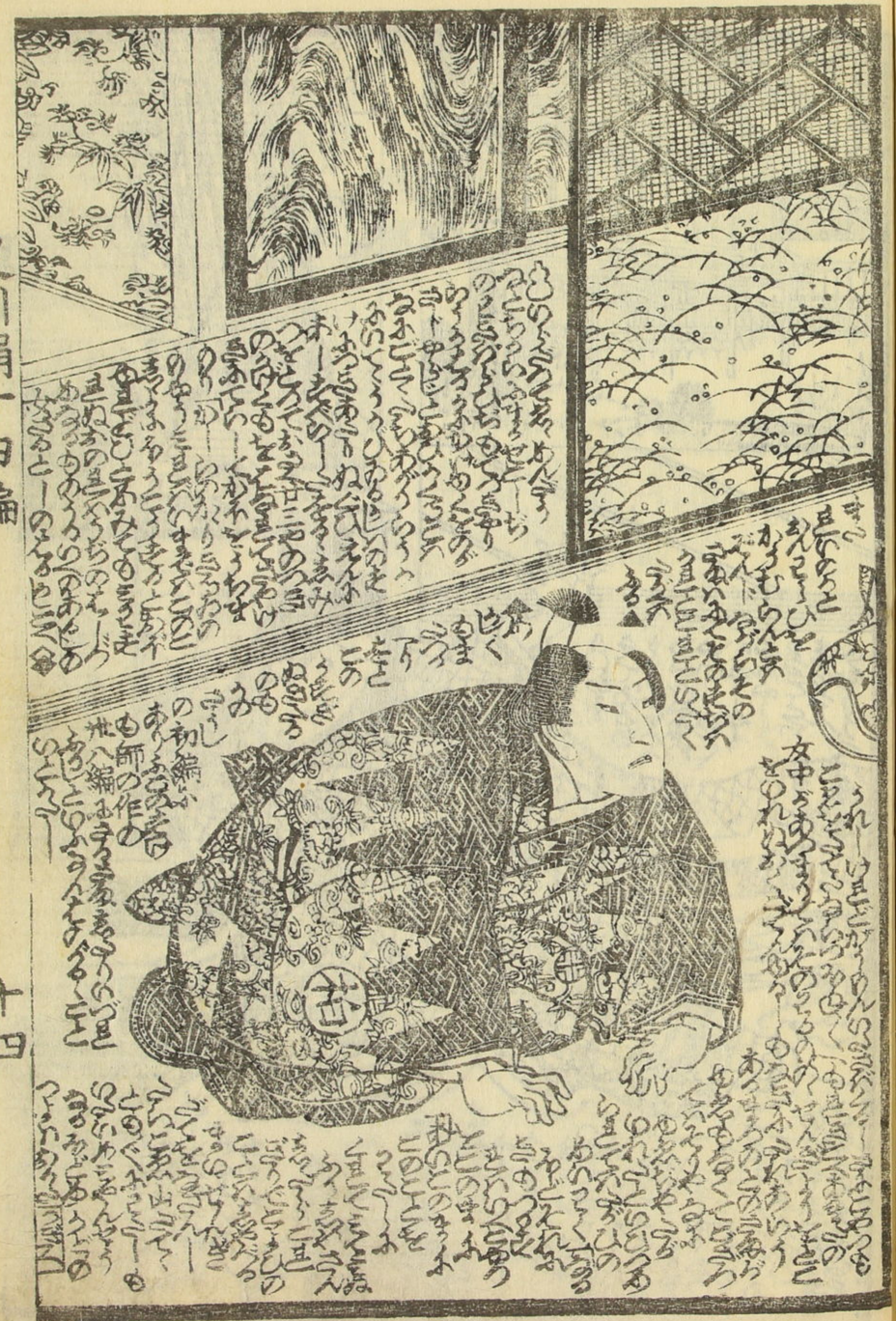
仙界模
曲弦
俗



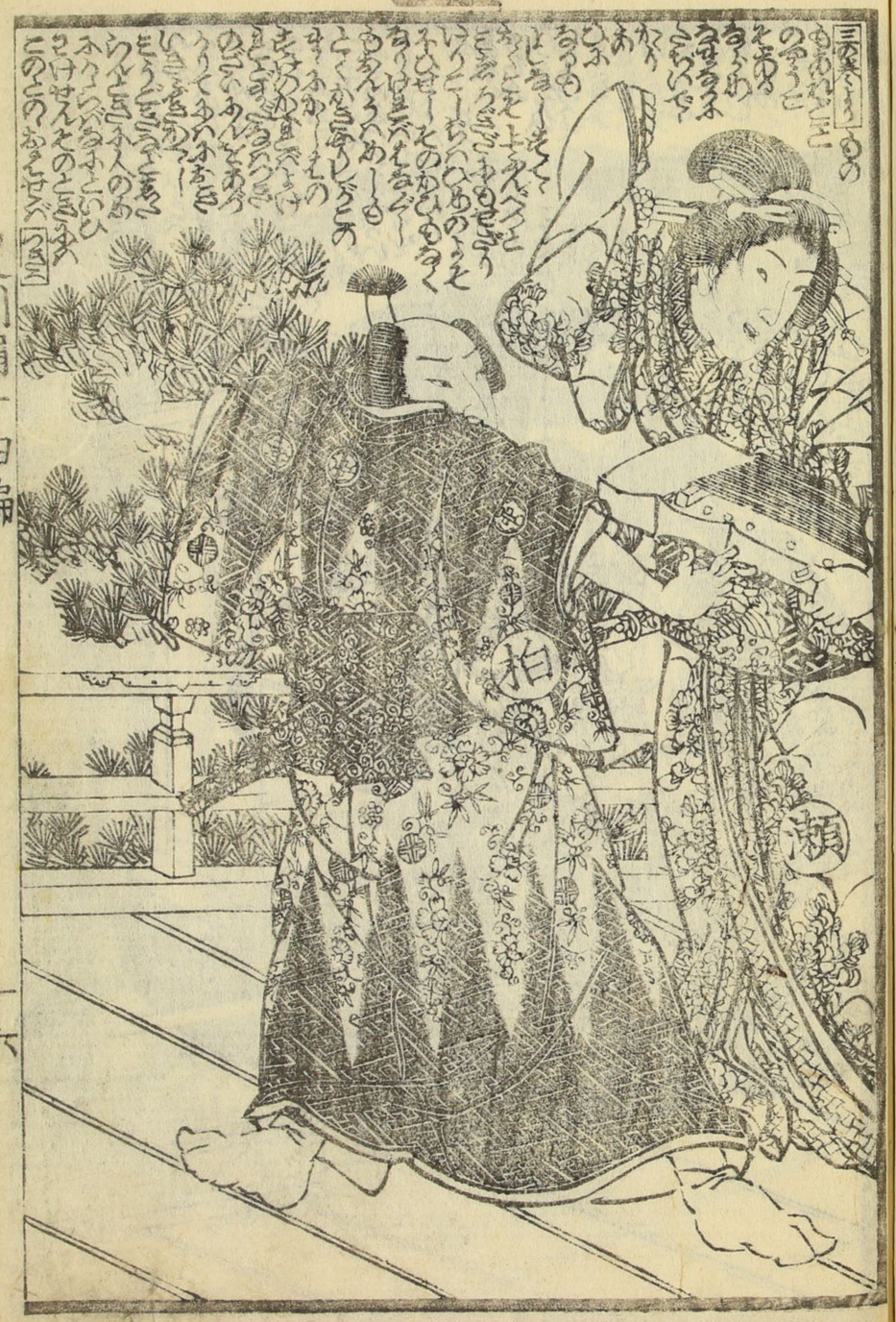


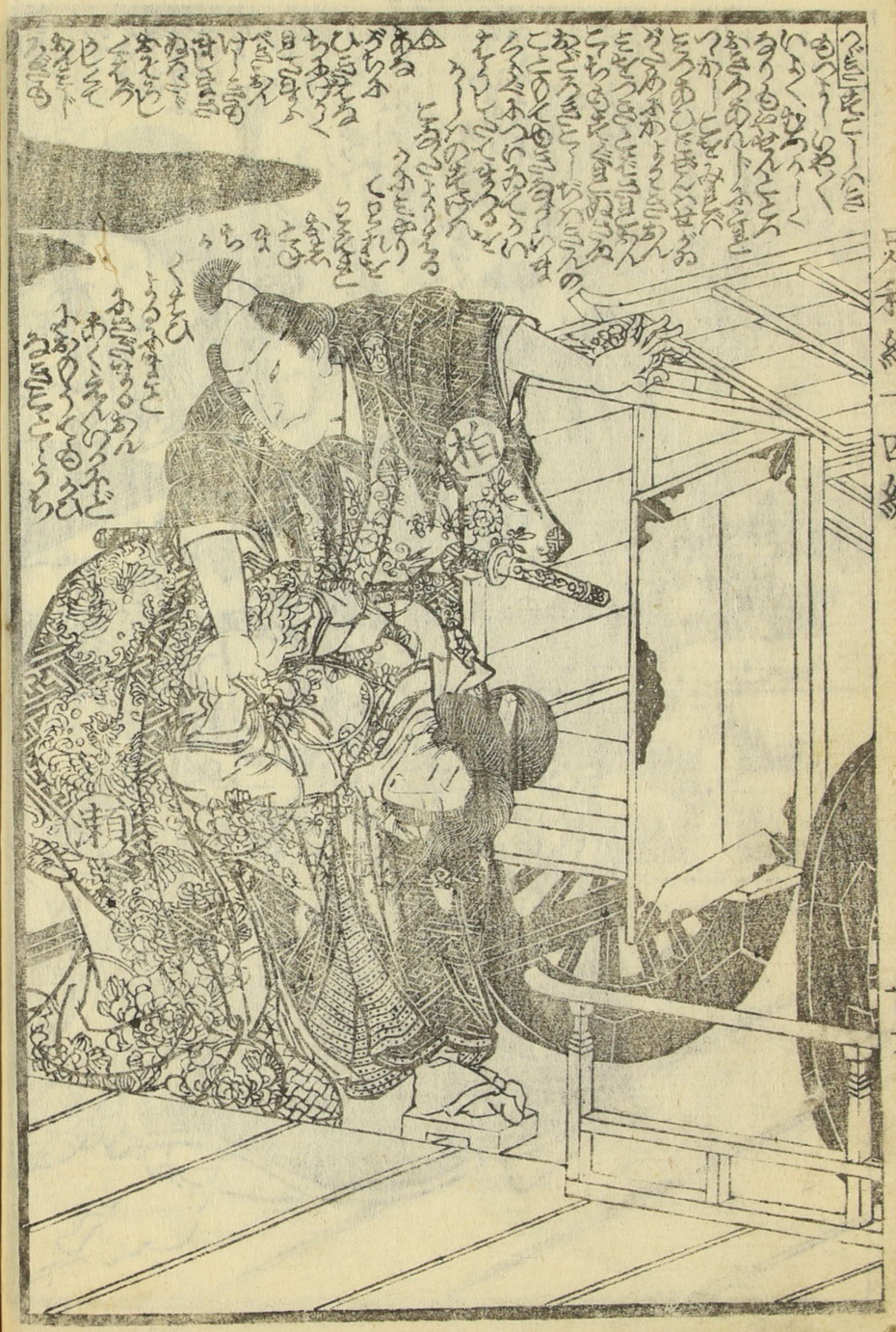
仙果作
國貞画

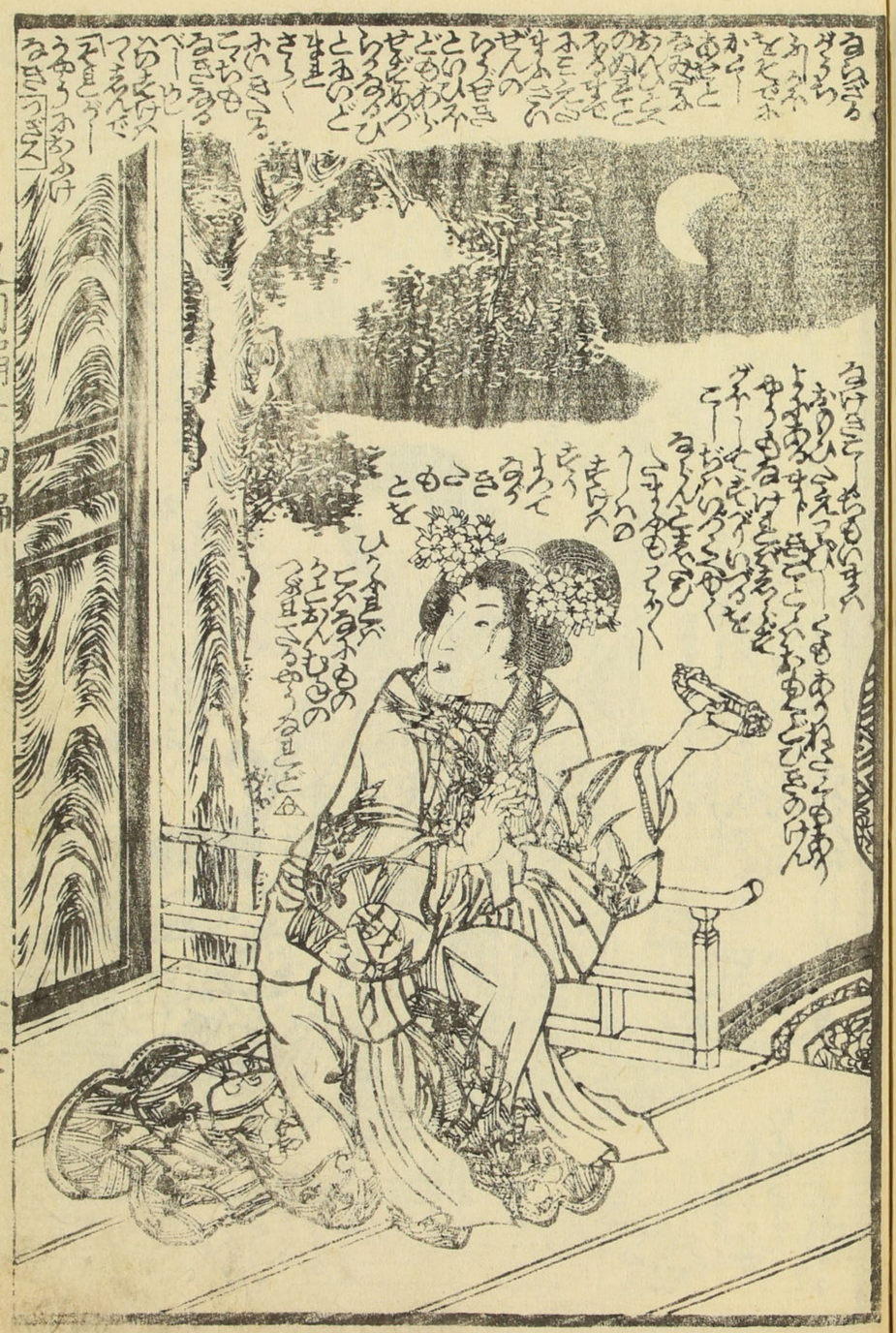




越


柏
瀬





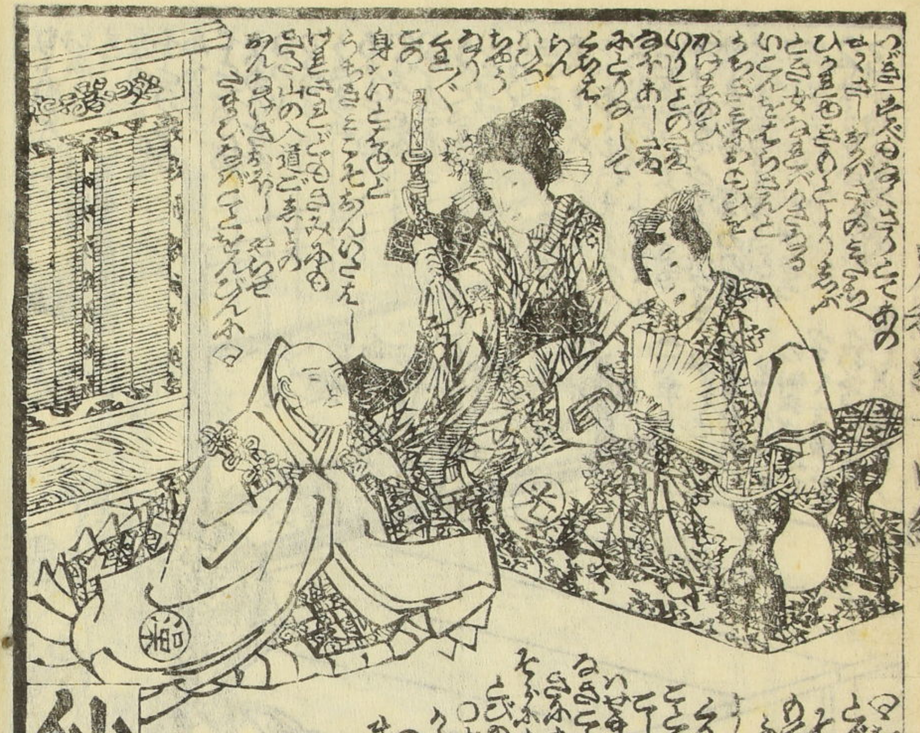
非諧源氏とゝ書とるゑ物語の大意を耳近き
語のてそゝくかきさろ贈答の詠哥ハ古くく蔓句ゑ
此若菜の下ゑ
沙うう先輩もとれうや原られけん

とりてこゝよりどうこひとぶるよあろ君　かゝゑ
花ちゆゆ　女三宮
つるぶちて我ゑ採用て本編のてこるたをも聊へ　かゝゑ
この男の住ゆ
ゆぶらうもこと支巷のゑんもあしが又思のふさてゑ
灰毛の野トゝ猫ゑ真紅の組紐つけてるゆうゑて
きこゝのさい牧目ゑとて季とのひ切字もゆりろるに
十七文字を例のごとく苦案して他力を借りて
此といそでもさゑゝげるけるど若女の
老婆ゑゆうくさるも本意うて

作者仙果ひとこと

○文車
書物
調度
利
車長持

文車
風流
制度
文車



仙果作　國貞画

新刻校合　御江戸昌平町鑑　朱字綱注横本　半紙摺　薄用摺　全一冊

正校三度稽古用本　彩色　校摺　毎月お渡し出し

兩筋戀の山道　全二冊　應賀作　國芳画

亀鑑浦島草紙　初編　二編　笠亭仙果校合　柳齋琴繁作　錦朝楼芳希画

東山奇談　娚娜櫻　種吉作　芳玉画

のしぶき　極彩色　上仕立　楽しみ文双六　芳幾画

嘉永六丑年新彫

刊行書肆　東都神田鍛冶町　太田屋佐吉